地域調査報告 23 135-145 2001

諏訪湖畔における観光資源の多様性と地域間提携

山下亜紀郎

キーワード：諏訪湖畔，観光地，多様化，地域間提携

I はじめに

昨今における観光形態は大きく変化している。すなわち従来までの画一的，経済至上主義的な「マス・ツーリズム」に対応した観光施設開発で特徴づけられる時代から，各地域が自らの地域性を活かした，個性的，差別的な観光振興を志向する時代へと移行してきた。消費する側としての旅行者の立場からも，可処分所得と余暇時間の増大は，観光に対する関心を一層向上させており[1]，人々の観光行動は量的な増加をみるだけでなく，質的にも多様化している[2]。

観光業は，経済的側面からも，わが国における主要産業の1つへと成長しつつあり，一方で，単に産業振興上の経済的意義だけでなく，「地域おこし」の中で，文化的，教育的な広い視野からも推進されるようになっている[3]。とりわけ既存の農・工・商業が衰退した地域において，そういった傾向は顕著である。

上述のことと相まって，現在の観光行動は，特定の大規模なテーマパークや温泉地を訪れる形態から，小規模ながら個性的で多様な施設や地域を巡回する形態が好まれるようになってきた。こうした観光需要の多様化に対応するように，観光客を受け入れる観光地域においては，「地域間提携」が盛んになりつつある。地域間提携とは，単独では魅力に乏しい小規模な観光地あるいは自治体が，互いに提携することによって，個性的で多彩な複数の観光資源を包含した，1つの広域観光圏を形成することである。

長野県においては，1996年に策定された長野県観光振興基本計画「さわやか信州プラン21」の中で，県土を6つの広域観光圏に区分し，それぞれについて観光振興の基本的方向をまとめている[4]。本稿で対象とする，諏訪湖畔に関しては，同基本計画の中で，諏訪地方の観光振興策の1つとして，諏訪湖周遊観光の推進を掲げている。

諏訪湖畔は，湖そのものを活用する遊覧船や釣舟をはじめとして，上諏訪・下諏訪温泉，諏訪大社などといった観光資源を抱え，長野県下有数の観光地として発展してきた。また近隣には，霧ケ峰高原や八島高原などの高原観光地を有する。さらに近年では，湖畔に多数分布する美術館・博物館に象徴されるように，非常に豊富で多様な観光施設が立地している（第1図）。

本稿では，各自治体や観光施設での資料収集と聞取り調査に基づき，諏訪湖畔に位置する諏訪市，下諏訪町，岡谷市の2市1町における観光資源の特徴を明らかにする。さらに，観光の多様化，地域間提携が進展する中，個々の地域がどのような個性化を図り，1つの広域な観光地としての多様な魅力を創造したかについて論述する。

II 諏訪市の観光資源

明治期以来，諏訪市の観光は，冬季のスキーやスケート，ワカサギの穴釣り，そして湯治場とし

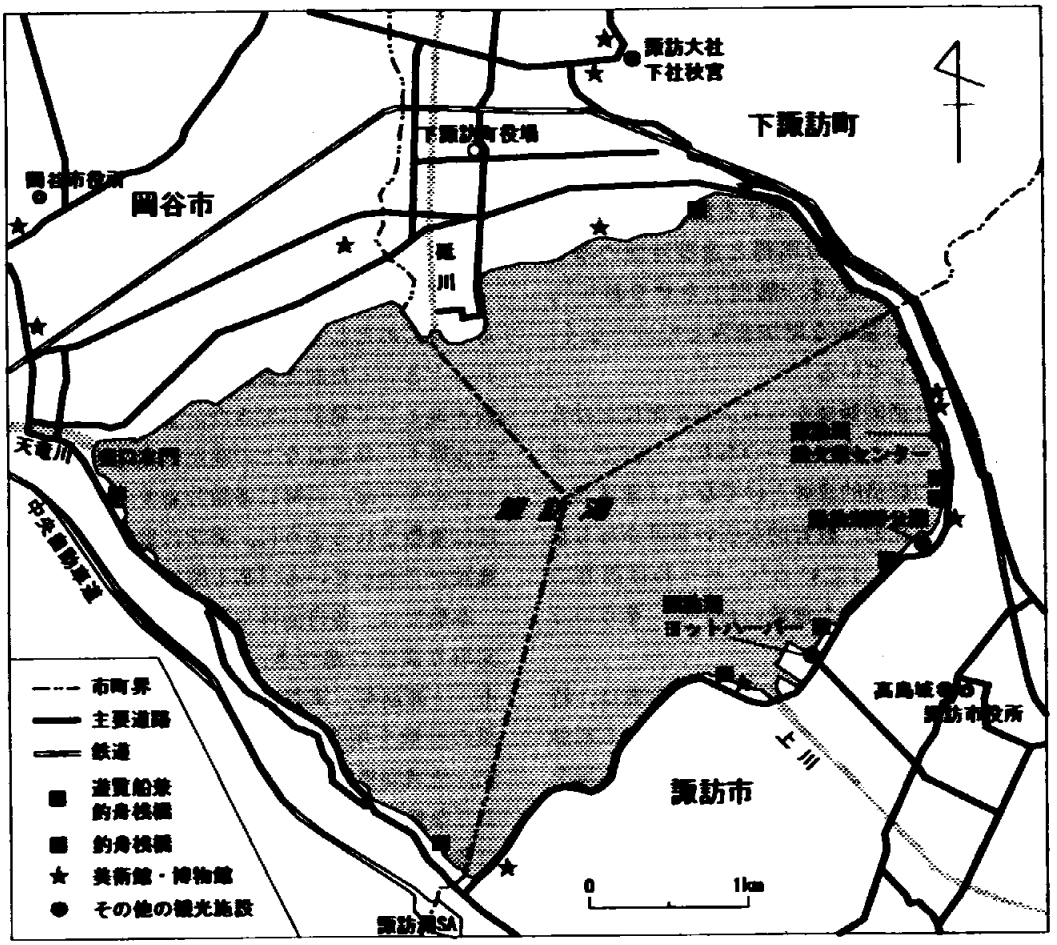
ての上諏訪温泉がその中心であった。しかし1960年代頃から次第に，夏季に多くの観光客が訪れるようになった。

現在の諏訪湖畔の主な観光施設は，第1図からも分かる通り，諏訪市に集中している。遊覧船や釣舟，ヨットハーバーといった湖そのものを資源とする観光形態も三市町の中で最も充実している。下諏訪町との市町界から上川河口にかけての湖岸沿いが，諏訪湖観光の中心地域であり，諏訪湖は諏訪市にとって最も重要な観光資源である。

Ⅱ－1　上諏訪温泉

上諏訪温泉は，江戸時代には甲州街道の宿場町（上諏訪宿）として栄えた。明治期以降は，近隣の農民も農閑期の湯治場として利用した。また，当時この地が製糸業で栄えていたことから，製糸業者の余暇活動や製糸の仲買人の宿泊施設としても活用され，温泉旅館の立地が相次いだ。現在，老舗とよばれる旅館の多くも，明治末期から昭和初期にかけて創業されたものであり，当期は温泉観光地としての上諏訪温泉の形成期であり，最初の活況期でもあったといえる[5]。

戦争の混乱期を経て，1950年代から再び上諏訪温泉は最盛期を迎えた。1949年と1955年に，蓼の海で国体スケート競技が開催されたのを契機に全国から多くのスキー，スケート客が訪れるように



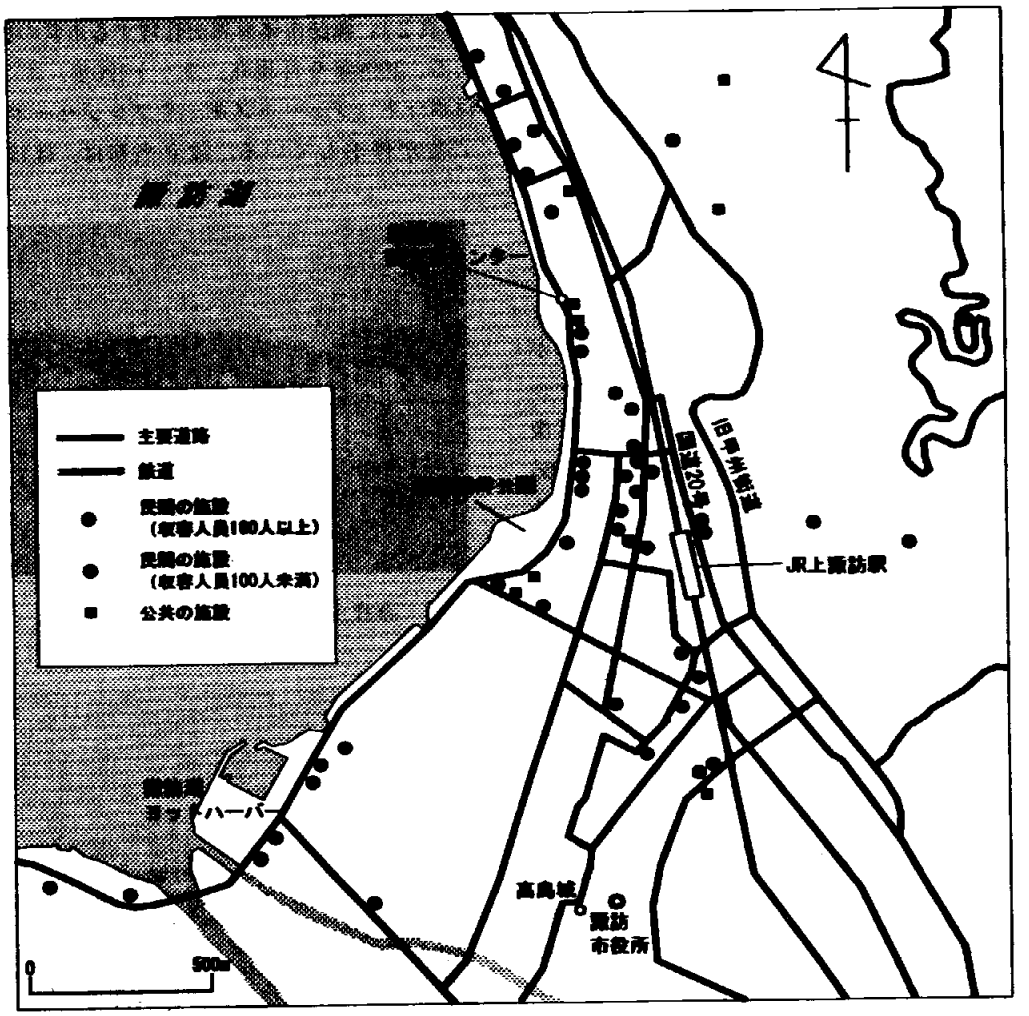
第1図　諏訪湖畔の概要と主な観光施設（2000年）
（国土地理院発行2.5万分の1地形図『諏訪』より作成）

なった。冬季のワカサギ釣り客や首都圏からの会社の研修や社員旅行にも利用されるようになった。

しかし1980年代以降，宿泊客数は減少傾向にある。全国各地に温泉観光地が形成され，客足が分散したこと，常連客の訪問頻度が低下したこと，高速交通網の整備とともに日帰り客が増加したことなどが要因である。それに伴い廃業する旅館も現れ，1978年に106軒あった上諏訪温泉の宿泊施設は，1999年には61軒となった[6]。

第2図に上諏訪温泉における宿泊施設の分布を示した。元来，上諏訪温泉は，JR上諏訪駅を中心に旧甲州街道，国道20号沿いに発展した。しかし現在では，後述する湖岸地域の開発に伴い，湖岸に沿って多くの施設が立地している。収容人員100人以上の大規模な施設は，いずれも比較的新しく，駅から湖畔公園にかけての一帯と湖岸沿いに分布する。利用者は主に観光客であり，首都圏あるいは中京圏から自家用車で訪れる家族連れがほとんどである。一方，駅周辺や駅南部では，旧来からの零細な施設が大部分を占める。近年はビジネスホテルとしての性格が強く，観光客の割合は約半数にとどまっている。

このように上諏訪温泉の宿泊施設は，規模およ



第2図　諏訪市中心部における温泉宿泊施設の分布（2000年）
（諏訪湖温泉旅館組合の資料より作成）

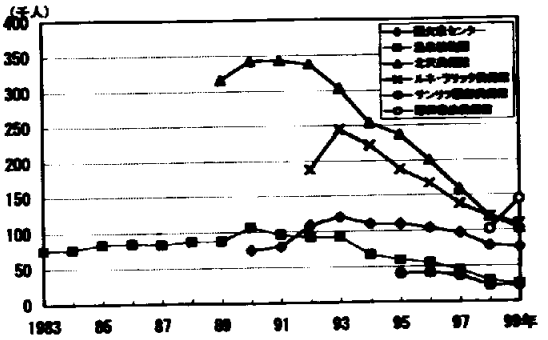
び客層の面から大きく2つに区分できる。湖岸地域の観光開発に伴い，温泉宿泊地としての中心も，旧街道沿いから湖岸へ移行してきたといえる。

Ⅱ－2　湖岸地域の開発

諏訪湖岸では，1960年代頃から貸船業（夏季の遊覧船や貸しボート）や釣舟業（冬季のワカサギ釣）が営まれ，スケートとともに諏訪湖観光を代表する観光形態であった。しかし近年では，これらに加えて，諏訪湖畔公園，諏訪湖ヨットハーバー，諏訪湖間欠泉センターなど，きわめて多様な観光資源が開発されている。その他，1989年，諏訪北澤美術館が完成したのを皮切りに，1998年までに4つの美術館が相次いで開館した。しかし第3図によると，これらの美術館は開館から数年間，多くの来館者を集めるが，その後衰退傾向にあるという点で共通している。

1）諏訪湖畔公園の建設と景観形成事業

諏訪湖岸では，市によって1952年に第一湖畔公園，1960年に第二湖畔公園が建設された。以降，当地域では，1967年に水族館（1987年に廃止）が造られ，1978年，芝生の石像群，1980年，スケートのブロンズ像，そして1981年，羊のブロンズ像と次々に新しいモニュメントが設置された。1986年には，地元の大企業であるセイコーエプソン株式会社が出資して，現在の諏訪湖畔公園が整備された。



第3図　諏訪湖畔における主要観光施設別入場者数
（諏訪市『観光動態要覧』より作成）

長野県の事業としても，1967年から湖岸の埋立ならびに護岸整備が行われ，1992年に，全周15.9kmの整備が完了した。引き続いて1995年からは，「諏訪湖の水辺整備に関するマスタープラン」に基づき，水生植物群落の復元や親水景観の整備が進んでいる。諏訪市側で最初に整備が施され，1997年に完成した。この新しく形成された湖岸景観は，地元住民や諏訪市を訪れる観光客に親しまれている（写真1）。

2）諏訪湖ヨットハーバー

諏訪湖ヨットハーバーは，1978年，諏訪湖が国体ヨット競技の会場となることを契機に造られた（写真2）。諏訪市体育課が管理する市営の施設である。1999年9月現在，ヨット120隻，エンジン付ボート（ジェットスキーやプレジャーボート）75隻が停泊している。設立当初は，ほぼ100%

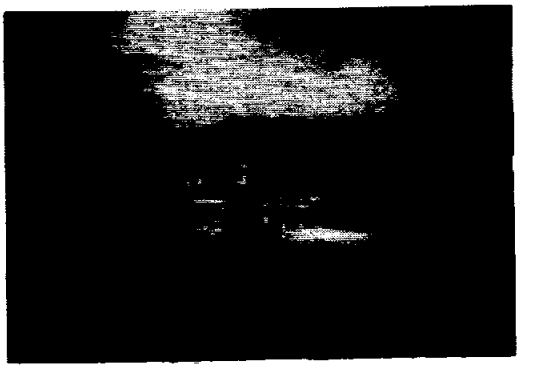


写真1　諏訪湖畔公園と親水景観

写真2　諏訪湖ヨットハーバー

ヨットであったが，年々ボート，とりわけジェットスキーの割合が高くなっている。それはヨットやボートと比して安価で，20代の若者にも購入可能であること，ヨットよりも準備と後片付けに要する時間が短いことが理由である。

停泊船舶の所有者は，長野県内の人が約8割を占め，その他も東京，神奈川，千葉など関東在住者である。性別では大部分が男性である。ヨット所有者の年齢層は幅広く，60代の人もいる。一方ジェットスキー所有者のほとんどは20～30代の世代である。

利用者の中には，船舶を停泊させている人以外にも，船舶を直接持ち込んでくる人もいる。ボートが主流だが，ウインドサーフィンやカヌーも近年多い。カヌーは河川で行う競技であるが，初心者が，河川より穏やかな湖で練習しているのである。カヌーをすることができる湖は，県内では諏訪湖だけである。ボート等の持込は休日に多く，1日最大で30隻訪れる。1999年度は4月1日から9月22日までの175日間で447隻の持込があった[7]。

上記のような個人的な余暇活動の他に，ボートの小売業者主催のボート教室や，ヨット連盟主催のヨット教室も定期的に開催されている。また毎月1回，船舶免許の実地教習や，連盟の月例レースにも利用されている。

このように諏訪湖は近年，県内に海を有さない長野県において，マリンスポーツの中心地となっている。

3）諏訪湖間欠泉センター

諏訪湖間欠泉センターは，1990年4月，諏訪市が約10億円を投じ建設された（写真3）。運営主体は，諏訪市と諏訪湖温泉旅館組合との第3セクターである。

1983年6月2日，市営の温泉を掘削中に，当地に間欠泉が噴出した。これは噴出高日本一を誇る大変貴重なものであったが，噴出時には，近隣の住宅地域に温泉の雨を降らせることとなり，住民から苦情が相次ぎ[8]，間欠泉を封鎖する要望が殺到した。そこで飛沫が民家の方へ飛ばないように防ぐ目的で，諏訪湖間欠泉センターを建設した。高さ約20mのセンターは，間欠泉を取り囲むようにして建てられている。風向によって噴出高を調節することで，民家へ飛沫が飛ばないようにしている。センターのコンピューターで噴出時刻を予知し，風向を観測する。東風（民家に向かって吹く）の時には，噴出口に網目状の蓋を被せて圧力を弱め，噴出高がセンターの高さを超えないよう調節している。

センターは3階建てで，1階は間欠泉から噴出する湯を利用した温水プールと露天風呂などから成る。2階は諏訪湖と温泉をテーマにした展示施設，間欠泉マルチビジョン，御神渡りジオラマ，諏訪の民話が楽しめる視聴覚施設，オルゴール館から成る。3階は展望ラウンジと土産品販売コーナーになっている。

入館者数は年間約10万人である（第3図）。観光客が約8割を占め，その内6～7割が周辺宿泊施設の客である。従来は関東からの観光客がほとんどであったが，近年は中京圏や福井，大阪からも多い。休日に客が多く，小中学校の春季・夏季休業中が最盛期である。観光客以外では，地元の小中学生，地域の婦人会などの団体客も訪れる。

Ⅲ　下諏訪町の観光資源

下諏訪町の起源は宿場町・門前町である。旧中山道と甲州街道の合流点に位置した下諏訪宿は，交通の要衝，保養温泉地として繁栄してきた。

第4図によると，現在の下諏訪温泉における温

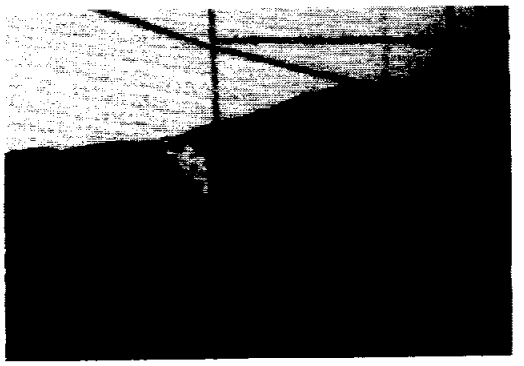
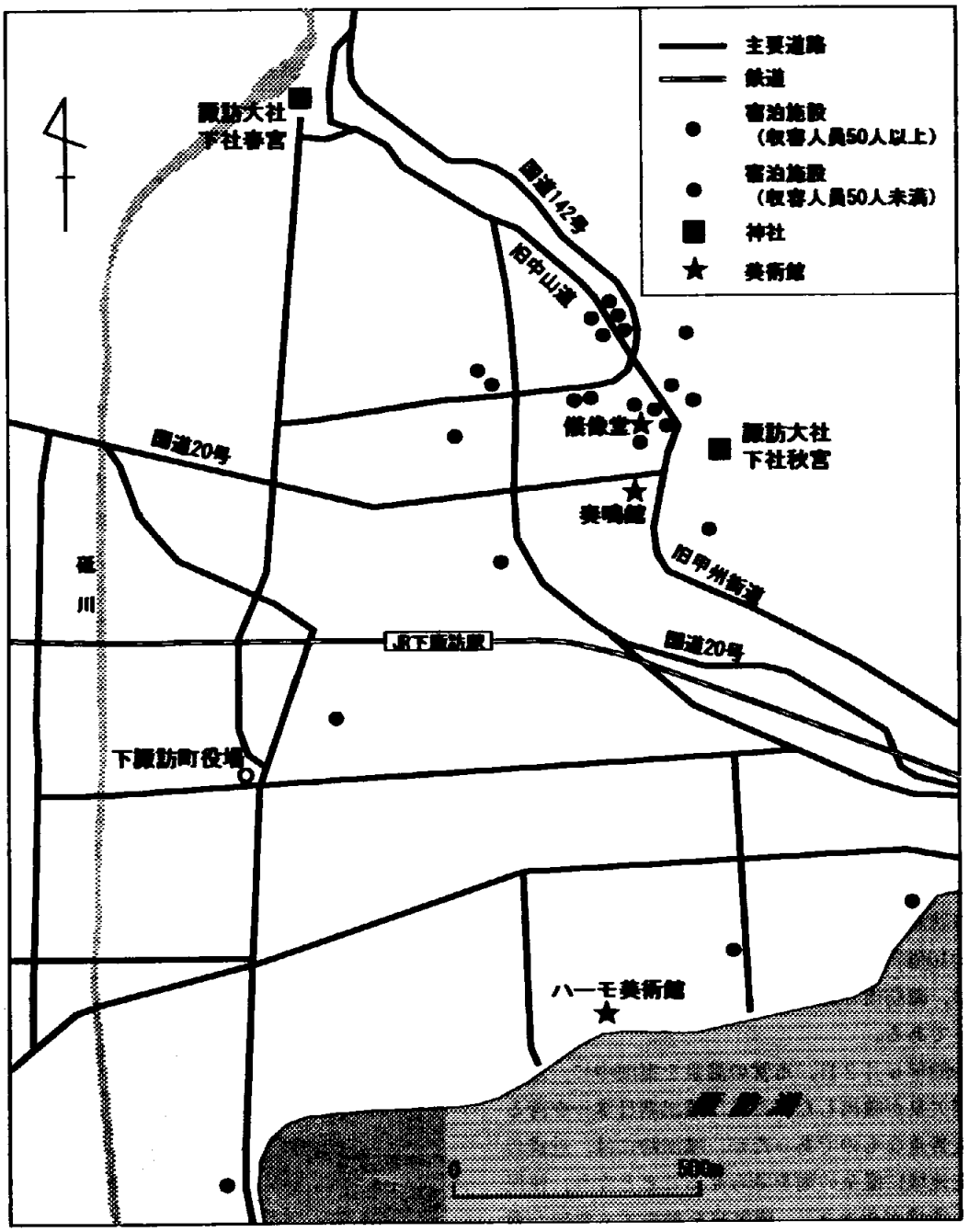


写真3　諏訪湖間欠泉センター

泉宿泊施設も，両街道の交点である，諏訪大社下社秋宮周辺に集積している。収容人員50人未満の小規模な施設が大多数を占める。諏訪市のように，湖岸地域の開発に伴い，大規模な施設が新規に立地している傾向はみられない。観光の中心地は，依然として諏訪大社下社秋宮周辺であり，諏



第4図　下諏訪町中心部における温泉宿泊施設と主要観光施設の分布（2000年）
（下諏訪町商工観光課の資料より作成）

訪湖は観光資源として，さほど重要視されていない。

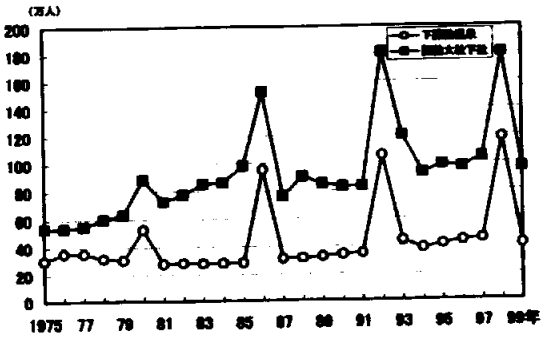
第５図に下諏訪温泉と諏訪大社下社における観光客数の推移をグラフ化した。６年に１度，観光客数が激増するが，これは諏訪大社の最大の祭事である「御柱祭」が開催された年に該当する。「御柱祭」とは，諏訪大社の四隅に建立されている御柱を，６年に１度，寅年と申年に新しいものへ交換する祭事である。諏訪大社下社の御柱は，祭りの前年に，八島高原に近接する観音沢の国有林から伐採される。当年４月の山出し祭で，伐採地から曳行され，５月の里引き祭で，大社に建立される。曳行の際には，大木を急峻な斜面に沿って一気に落とす「木落とし」が実施され，豪壮･奇抜，且つきわめて危険な祭事として全国的に有名であり，毎回大変多くの見物客が訪れる。

第５図によると，下諏訪町を訪れる観光客数は年々微増傾向にある。客層の大部分は50歳以上の年代であるが，毎年訪れている人も多く，規模こそ大きくないものの，宿泊施設の経営も比較的安定している。施設数の増減も少なく，最近30年間で４軒が休・廃業したのみである。2000年５月現在の宿泊施設数は33である。

近年の観光開発もまた，諏訪大社下社秋宮付近で行われる傾向にある。自治省（現在は総務省）のふるさとづくり事業の採択を受け，1994年から「湯の里浪漫整備事業」が開始された。当事業によって，1995年３月20日に諏訪湖オルゴール博物館「奏鳴館」（写真４），1996年３月18日に諏訪湖時の科学館「儀像堂」が開館した。それぞれ「オルゴール」と「時計」に関する博物館であるが，ともに，精密機械工業地帯として飛躍的に発展してきた諏訪地方の代表的な工業製品である。奏鳴館には，オルゴール生産で世界的シェアを誇る，三協精機製作所が所蔵するオルゴールを中心に展示されている。儀像堂には，セイコーエプソン株式会社が寄贈した数々の時計を始め，「時」に関する模型や実験装置が展示されている。とりわけ等身大の水運儀像台は世界唯一である。旧諏訪精工舎（現在のセイコーエプソン社）の技術者が中心となり，中国北宋時代の水運儀像台に関する資料を解読したことが契機となり，当地に復元された。

両博物館の運営主体は，町から委託を受けた，町内宿泊業者有志の団体である。下諏訪町活性化のために，町が観光事業に多くの予算を費やしたので，最大の受益者たる宿泊業者が運営を引き受けることになった。

奏鳴館には年間約９万人，儀像堂には約４万人の来館者が訪れている。しかし諏訪市に開館した４つの美術館と同様，開館当初に来館者数が最も多く，その後漸減する傾向がみられる。奏鳴館の来館者数は1996年度に10万839人であったが，99年度は８万6,822人となった。儀像堂では1997年度の４万9,804人が，99年度には３万7,022人に減少している。



第５図　下諏訪温泉・諏訪大社下社における観光客数の推移
（下諏訪町商工観光課の資料より作成）

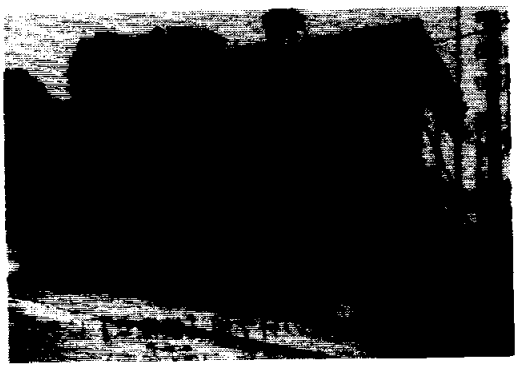


写真４　諏訪湖オルゴール博物館「奏鳴館」

両博物館とも地域の主要産業に関連したテーマを掲げており，観光施設としてだけでなく，社会教育施設としても活用されている。体験工房がそれぞれに設置されており，来館者がオルゴールや腕時計を自主製作できる。客層は主に小中学生や20代の若年層である。県内や関東・中京圏からの修学旅行訪問先としても活用されている。第6図に儀像堂における1999年度の月別来館者数を表したが，8月に最も来館者が多く，5，7月がそれに次ぐ。7，8月は小中学校の夏休みにあたる。5月はゴールデンウィークに来館者が多く，また，修学旅行の最盛期でもある。

Ⅳ　岡谷市の観光資源

諏訪市や下諏訪町が，旧来から温泉を中心とする観光地として認知されてきたのに対して，岡谷市は，大正から昭和初期にかけて製糸業の町として発展した。現在も精密機械工業を中心に，事業所数で長野県下第2位，従業者数で第5位，製造品出荷額等で第7位の工業規模を誇る[9]。

岡谷市立蚕糸博物館・美術考古館は，旧製糸工場の跡地に建てられた（写真5）。岡谷市がかつて世界に誇る産業であった製糸業，養蚕業に関する博物館である。1964年10月15日に開館した。製糸業の経営者集団であった製糸研究会が収集・保存していた製糸関連の資料を，後世に残すために，当研究会が建設し，市に寄贈した博物館である。

繰糸機や織機の変遷，製糸業・養蚕業に関する記録資料や研究文献，そして絹製品やその最新技術などを展示している。また当館では家蚕[10]の飼育も行っており，希望者には無料で配布している。家蚕は市の小学校教育における飼育教材としても活用されている。

また，1970年11月3日には，蚕糸博物館に隣接して美術考古館が開館した。岡谷市に美術館がなかったことから，市の事業として建設された。現在は，博物館と連結して1つの建物となっている。縄文・弥生時代の考古品や，地元諏訪地方出身の武井武雄氏や田中隆夫氏の美術品を中心に展示している。展示替えは，毎年1回の特別展を含め年6回行われている。

第7図に来館者数の推移を図化した。美術考古館が開館した翌年の1971年に，初めて来館者数は1万人を超え，以降1980年代に最も活況を呈し

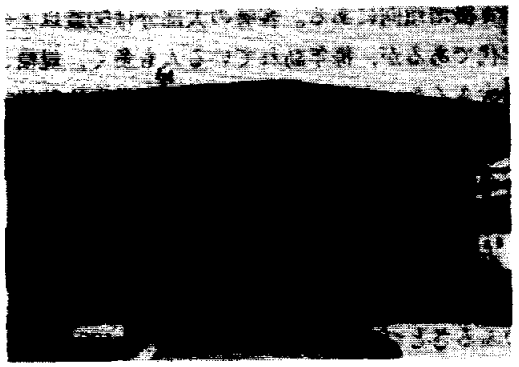
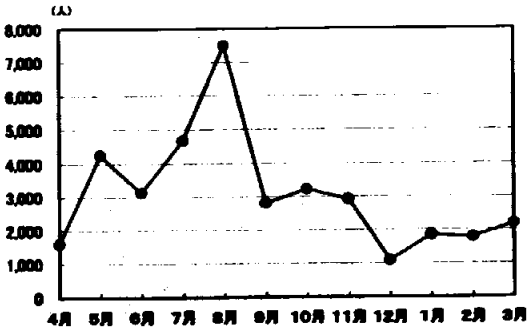
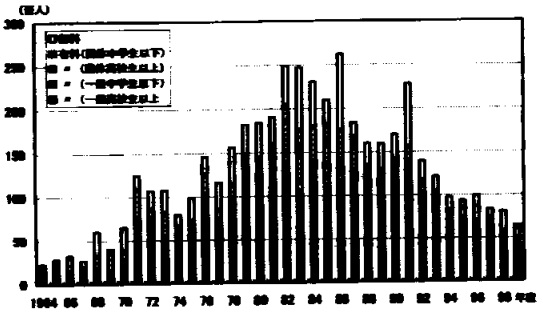


写真5　岡谷市立蚕糸博物館・美術考古館



第6図　諏訪湖時の科学館「儀像堂」における月別来館者数（1999年度）
（聞き取り調査より作成）



第7図　岡谷市立蚕糸博物館・美術考古館における来館者数の推移
（『岡谷市行政報告書』より作成）

た。1990年代になって，来館者数は年々減少傾向である。その最大要因は，団体客が激減したことである。1980年代には，小中学校の修学旅行訪問先として，多くの団体客を誘致した。しかし近年では，修学旅行がレジャー指向になったこともあり，当館のような社会教育施設は倦厭されるようになった。

とはいえ現在でも，一般有料客の比率は約50%であり，残りの50%は団体客と，行政視察などの無料客である。第1表に1999年度における団体来館者を一覧にした。観光ツアーはわずか4件であり，大学の調査・研究，小中学校や高校の修学旅行・社会科見学，そして地域社会組織における文化活動などといった，教育・研修目的のものが大部分を占める。11月以降は，織物業者の視察旅行が顕著である。これら団体来館者の多くが平日に訪れている。観光目的の一般客が休日，特に土曜日に多いのと対称的である。

一般有料客の地域別来館者比率をみると，長野県内が最も多く，43.8%を占める。この中には，岡谷市とその周辺市町村からの，教育目的の来館者も含まれる。一方，県外から訪れているのは観光客である。関東・東海地方で全体の42.6%であり，県内と合わせるとほぼ9割に達する。こうした傾向は，諏訪市や下諏訪町を訪れる観光客の動向と一致するものであり，観光地としての諏訪湖畔の集客圏が，関東・東海地方に特化することを表している。

岡谷市は，高原地帯に，多彩な野鳥の生息地として知られる塩嶺御野立公園，世界有数のスケート施設を有する鳥居平やまびこ公園，つつじの名所である鶴嶺公園といった観光資源を有するもの

第1表　岡谷市立蚕糸博物館・美術考古館における団体来館者（1999年度）

月日	人数	種別	月日	人数	種別
4月5日（月）	100	△	9月2日（木）	129	▽
13日（火）	70～80	×★	4日（土）	20	△
21日（水）	20	★	10日（金）	20	○
22日（木）	35	○	25日（土）	25	×
〃	18	☆	10月3日（日）	23	△
5月18日（火）	142	▽	7日（木）	50	▽
19日（水）	40～45	×	〃	10	☆
25日（火）	40	×	12日（火）	20	▽
27日（木）	30	★	13日（水）	80	▽
〃	26	○	14日（木）	12	▽
6月1日（火）	133	▽	15日（金）	25～26	×
10日（木）	43	▽	26日（火）	40	○
23日（水）	40	×	〃	44	▽
27日（日）	40	×	27日（水）	160	▽
30日（水）	100	▽	28日（木）	27	★
7月8日（木）	25	△	11月2日（火）	13	★
9日（金）	8	×	24日（水）	47	★
13日（火）	23	×	〃	32	☆
21日（水）	15～16	△	27日（土）	35	★
〃	80	▽	30日（火）	34	▽
22日（木）	24	×	2月9日（水）	33	▽
24日（土）	35	×	3月7日（火）	25	★
8月5日（木）	85	▽			
20日（金）	24	☆			
31日（火）	30	△			

○：観光ツアー　×：地域社会活動
△：大学研究・教育・社会活動　☆：行政視察
▽：修学旅行・社会科見学　★：業者研修

（聞き取り調査より作成）

の，従来，観光業は，諏訪湖畔の他２市町と比してさほど盛んではなかった。しかし，近年，精密機械工業が衰退傾向にあること，観光における地域間提携が進展していることなどから，近隣に温泉観光地を有するという利点を活用した地域振興策として，観光資源の開発が活発である。

1998年４月には，日本童画美術館「イルフ童画館」が開館した。岡谷市出身の童話作家，武井武雄氏による「童画」[11]などが展示されている。1998年度で43,315人の来館者を集めた。また，同年開館した岡谷絹工房には，絹織りの体験工房が設けられており，製品は「おかや絹」のブランド名で販売されている。一方，岡谷市を流れる天竜川は，うなぎが遡上していたことで知られており[12]，1996年から市は，「うなぎのまち岡谷」事業を実施している。岡谷市内のうなぎ料理店，川魚店，ホテル・旅館など計34業者からなる「うなぎのまち岡谷の会」が組織され，岡谷でのうなぎの養殖を成功させ，「すわ湖太郎」のブランド名で売り出すことを目標に活動している。

V　おわりに

以上，諏訪湖畔における観光資源について述べてきたが，観光地としての性格は，諏訪市，下諏訪町，岡谷市でそれぞれ全く異なるものであった。

諏訪市では，諏訪湖が最も重要な観光資源と位置付けられている。従来から，遊覧船や釣舟といった湖そのものを利用する観光形態が，３市町の中で最も活発であった。さらに湖岸沿い一帯における観光開発によって，非常に多様な観光資源が創出され，大規模な宿泊施設も湖岸に近接して建設された。このように当地は，諏訪湖畔における観光の中心地を形成している。

しかし，上記のような新しい観光資源の開発は，一時的な流行によって多くの観光客を集めるものの，それが長年にわたって持続しないという傾向がみられた。経営を持続させるためには，広報活動の充実や，さらなる資源の開発といった，新たな戦略の必要性に迫られる。つまり，多大な投資は，結果として同時に多大な消費を必要とし，それが達成されないと，また新たな投資が引き起こされるのである。諏訪市が現在のような観光地として発展してきたのは，上述の過程を辿った結果であると考えられる。また，大規模な宿泊施設の建設は，宿泊業者間での経営規模の格差を拡大させ，その結果零細な業者が廃業する場合も少なくない。観光地としての発展が，宿泊業者間での経営競争を激化させたのである。

一方，下諏訪町における観光の中心は，湖畔ではなく，旧街道沿いの諏訪大社下社秋宮周辺にある。神社や祭事，温泉といった伝統的な観光資源が現在でも主要であり，宿泊業者も規模こそ小さいものの，経営は比較的安定している。近年における観光開発も当地区において実施された。諏訪市のような，湖岸の開発による避暑地としてのリゾート化を志向しているわけではない。つまり，諏訪市が観光地として革新的・急進的であるのに対して，下諏訪町は保守的・漸進的であるといえる。

岡谷市は工業都市として，教育・研修目的の来訪者を集めたが，他２市町と比較して，一般観光客にはさほど受け入れられてこなかった。しかし近年では，諏訪市や下諏訪町に滞在した宿泊客に，岡谷市にも立ち寄ってもらうことを意図した観光開発がなされている。つまり，観光地としての岡谷市の性格は，諏訪市，下諏訪町が温泉を中心とする「滞在型」であるのに対して，「通過型」だといえる。近年の交通の発達によって，首都圏からも中京圏からも近接性が高い諏訪地方を訪れる観光客の多くが，日帰りするようになったこととも適合する。

諏訪湖畔の３市町は，それぞれ独自の観光戦略をとっている。最初に大規模な観光開発を行った諏訪市に対して，下諏訪町や岡谷市が，意図的にそれとは異なる戦略によって，観光地としての個性化を目指しているのである。具体的には，下諏訪町の保守的・漸進的な戦略，岡谷市の通過型観光地を目指す戦略である。しかしそれは，お互いが観光地として対抗しあっているのではなく，「諏

訪湖」というシンボルで結ばれた各市町が，地域性を活かし，欠如する点を補完しあいながら，より魅力的な広域観光圏を形成しようとしているのである。その結果として，諏訪湖畔の観光資源は，これまで述べてきたような地域的多様性を実現するに至り，昨今における観光客の嗜好の多様化に，十分対応しうる潜在力を備えつつあるといえる。今後は，各観光施設間を結ぶ交通面，情報面におけるネットワークの整備が，当地域の抱える課題であろう。

現地調査に際しましては，諏訪市観光課，公園緑地課，下諏訪町商工観光課，岡谷市商業観光課をはじめとして，諏訪湖温泉旅館組合，諏訪湖ヨットハーバー，諏訪湖間欠泉センター，諏訪湖時の科学館「儀像堂」，岡谷市立蚕糸博物館・美術考古館など，3市町関係各所の方々には，多大なるご協力を賜りました。末筆ながら記して感謝の意を表します。

[注および参考文献]

1）このような傾向を統計に基づいて地理学者の立場から分析したものに，佐々木博（1998）：『観光と地域』二宮書店，13-26．がある．

2）淡野明彦（1998）：『観光地域の形成と現代的課題』古今書院，169p.

3）山村順次（1995）：『新観光地理学』大明堂，270p.

4）長野県（1996）：『さわやか信州プラン21』56p.

5）温泉観光地としての上諏訪の発達については，諏訪市史編纂委員会（1976）：『諏訪市史下巻』，739-748．諏訪教育会（1986）：『諏訪の近現代史』．が詳述している．また，当時の上諏訪温泉の泉質等に関する，三澤勝衛による一連の研究（三澤勝衛（1931）：上諏訪温泉の泉質分布．地理学評論，7，239-262．三澤勝衛（1931）：上諏訪温泉地域の地下温度の分布．地理学評論，7，70-90．他多数）も見逃せない．

6）諏訪市『観光動態要覧』による．

7）船舶の停泊料は，長さ15フィートまでは年間5万円，30フィートまでは10万円である．持込料は，船舶の大きさに関わらず，一律1日520円である．

8）例えば，住居の屋根が傷む，窓が白く汚れる，自動車が錆びる，洗濯物を屋外に干せない，などといったものである．

9）岡谷市『岡谷の工業'99』による．

10）蚕の品種は，家屋での飼育用品種である家蚕と，野生種である野蚕とに二分される．

11）「童画」とは，童話の中で描かれる絵画を意味する，武井氏による造語である．

12）現在では中流部におけるダム開発などの影響で遡上してこない．